すみだ地域学情報 We!

第19号
2012年
（平成24年）
2月発行

発行：墨田区教育委員会（生涯学習課）
〒130-8640 墨田区吾妻橋一丁目23番20号
☎ 03-5608-6309 FAX 03-5608-6411 ✉ syougaigakus@city.sumida.lg.jp

ふれあい 活力 ゆとり
すみだ

すみだ やさしいまち宣言・人と地域と環境のために

すみだの風景

隅田川七福神をめぐる

昔も今も、お正月の「隅田川七福神めぐり」が多くの人に親しまれています。

特に、今年は初詣の折に、5月22日の開業を予定している東京スカイツリー®も見ようと、多くの皆さんがその周辺を訪れました。

七福神は人間の徳と考えられた長寿（寿老人）、富財（大黒）、人望（福禄寿）、正直（恵比寿）、敬愛（弁財天）、威光（毘沙門）、大量（布袋）のことです。

隅田川七福神めぐりは、文化元年（1804）に向島百花園を開いた佐原鞠塢が所有する「福禄寿」を祀っているのを文人墨客が見て、この地にも七福神をそろえようと苦心をして探したのが始まりといわれています。

では、本区の北から南へ、七福神を祀る6ヵ所の社寺などをめぐりましょう。（約2時間）

多聞寺（墨田五-31-13）

天正年間（1573～1591）に、四十一代鏤海上人が、ある夜、夢に毘沙門天尊像を感得して以来、本尊を毘沙門天とし（それまでは不動明王）、隅田山吉祥院多聞寺と改称したといいます。

多聞寺は区内の最北端にあり、震災・戦災ともに遭わなかったので、昔日の面影を残す数少ない寺院となっています。

木造茅葺切妻造四脚門の様式をとり、境内正面入口に東面して建てられている山門は、多聞寺に残る唯一の江戸期木造建築であり、区内最古の建造物と考えられています。

白鬚神社（東向島三-5-2）

昔は境内に松、けやき等が多く、白鬚の森といわれ、向島百景、隅田川二十四景に数えられていました。社伝によると、天暦5年（951）に慈恵大師が関東に下向の折、近江国志賀郡に鎮座の白鬚大明神の分霊をここに祀ったと伝えています。これをその名が示すとおり、白い鬚の老人であろうと見なし、七福神のうちの寿老神としたといわれています。

向島百花園（東向島三-18-3）

佐原鞠塢は仙台に生まれ（他説もありますが）、天明年間（1781～1788）に江戸に出て、芝居茶屋に永年勤めたのち、日本橋住吉町で骨董店を開き、大いに繁盛しました。その後、剃髪して鞠塢と号し、寺島村に百花園を開きました。百花園という名は、「梅は百花のさきがけ」という意味です。この名園も安政の大地震以来しばしば災難に遭い、また今次の大戦ですべて焼失し、現在の姿にまでなったのは昭和33年頃以降のことです。

長命寺（向島五-4-4）

寛永（1624～1643）のころ、三代将軍家光（家康という説もある）が、この辺りに鷹狩りに来た時、急に腹痛をおこしましたが、当時の住職が加持した庭の井戸水で薬を服用したところ痛みが治まったので、長命寺の寺号を与えたといいます。本堂には弁財天が安置され、古くは境内に弁天堂や芭蕉堂がありました。

芭蕉の句碑「いざさらば雪見にころぶ所まで」は、この地で詠まれたという確証はありませんが、雪見の名所向島にふさわしい句ではないでしょうか。

弘福寺（向島五-3-2）

現在の本尊釈迦如来像は、江戸時代の仏師松雲禅師の作といわれています。黄檗宗特有の唐風の特徴をもち、正面に二つ見える円窓、堂前の月台など、他の寺院にあまりみられないものです。京都万福寺の本山と同じ建築様式、禅宗にちなみ、大雄宝殿に布袋尊が安置されています。

境内には、人呼んで「咳の爺婆尊」の石像があり、咳・風邪の病にご利益があると、煎豆や番茶をそなえて供養する習わしが伝わっています。

三囲神社（向島二-5-17）

文和年間（1353～1355）近江国三井寺（滋賀県）の僧源慶が、東国遍歴のとき、牛島のこのあたりに壊社を見つけ、弘法大師ゆかりのことを聞いて、社を改築しようとしたところ、土中より白狐にまたがる老翁の像を得ました。その時、白狐が現れ、神像を三回まわったところから「三囲」の名としたと伝えられています。

神社の本殿は文久2年（1862）に建築・明治の修繕で、震災・戦災を免れました。

著名な伝承として、元禄6年（1693）に、俳人宝井其角が村人に代って雨乞いのために句を詠じ、翌日雨がふったと「五元集」にあります。境内には七福神のうち、恵比寿・大国神の二神が祀られ、その内殿は文久3年（1863）大工棟梁清水喜助が寄進した立派なものです。

参考
「すみだの史跡文化財めぐり」
（発行　墨田区教育委員会
平成4年3月）

【訂正】前号の「墨堤の碑林」の記事中、天下之糸平碑の所在地が隅田川神社とあるのは、「木母寺」の誤りにつき訂正し、ここにお詫び申し上げます。